

現代の国語・言語文化 問題

注…解答はすべて解答用紙に記入のこと。なお、出題作品には、設問や

読解の都合で多少原文の表記を変えているところがあります。

(その一)

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

一 の問題は、著作権の利用許諾が得られていないため、非公開とさせていただきます。

(正高信男「ケータイを持ったサル」より)

(注) 丹前 ……厚く綿を入れた広袖の着物。

問一 二重傍線部 a と e について、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 A に入る語として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選びなさい。

ア 子育て イ スキンシップ ウ 家族 エ リラックス オ しつけ

問三 傍線部①「サルと類似する傾向」が書かれている文を抜き出し、初めの五字を答えなさい。

問四 傍線部②『「べた靴」現象』には、どのような願望が表れているか。本文中の語句を用いて説明しなさい。

問五 傍線部③「かなり奇異な代物であった」と筆者が感じたのはなぜか。理由を答えなさい。

問六 B に入る語を文中より二字で抜き出しなさい。

問七 傍線部④ルーズソックスの「最大の機能」とは何か、本文中の語句を用いて答えなさい。

問八 波線部 (一) ～ (ロ) の本文中の意味として、最も適当なものを、次の各群のア～オのうちから、それぞれ一つ選びなさい。

(一) 恣意的に ア 根拠があつて イ 客観的に ウ 思いつきで エ 積極的に
オ 自信をもって

(ロ) 郷愁 ア 過去をなつかしむ気持ち イ 過去を悲しむ気持ち ウ あこがれる気持ち
エ 現状をさびしがる気持ち オ 感動する気持ち

問九 傍線部⑤「……」には、どのような言葉が入るか。本文中より五字以内で抜き出しなさい。

問十 傍線部⑥「公的」の対義語になるように C に適当な漢字を入れなさい。

問十一 傍線部⑦「それ」の内容を答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

二つまでのあらすじ

清和国際大学の松木浩太^(注1)は、箱根駅伝を走ることを目標に日々練習に励んできたが、予選で敗退した。心の傷がまだ癒えない中、^(注2)関東学生連合チームの一員として、箱根駅伝に出場することになった。

自分の吐く息の音を果たして聞いているのか、それともただ感じているだけなのか、松木浩太には分からなかった。鶴見中継所に向かうたつぷりと湿り気を帯びて凍てつく空気を裂いて、浩太は走っている。

努力は、必ずしも実を結ぶわけではない。

長く殺風景な権太坂を上りきった八キロ付近。一車線道路が二車線に拡がり、視界が開けてきた。市児童公園入口の信号を越えて下りに転じ、苦しい上りの坂道から解放されたところだ。

前走する荒川との差はジリジリ開いていく。

焦りが、冷静さを奪っていく。俺って、この程度か……。自分への怒り、悔しさ、^(一)ふがいなさに胸を塞^{ふさ}がれ、一瞬、集中力が途切れたその時――。

隙を衝^ついてきた新たなランナーがいた。コバルトブルーのユニフォーム、東西大の高梨だ。高梨は音もなく現れ、浩太の横に並んだかと思うと、鋭く前に出ていった。

必死に、その高梨に食らいついていく。ここで負けたら、本当の負けだ。浩太はそう自分に言い聞かせた。しかし、浩太の抵抗を嘲笑うかのよう^aに、高梨はヨユウで走っているように見える。

速い――。浩太は、かすかに戦いた^{おの}。おそらく、一キロ二分五十秒を切るスピードだろう。不意打ちのように戦いに引き込まれ、気付いた時には後手に回っている。高梨との距離は三メートルほどだか、少しでも浩太がペースを緩めれば、その差はあつという間に広がっていくに違いない。今出来ることは、その距離をなんとかキープすることだけだ。ひた走る浩太の脳裏に、

――今のお前は間違いなく二流だ。^(注3) 坂上の言葉が蘇^{よみがえ}った。

高梨の履いているシューズが、アトランティスの最新型だと気付いたのもその時だった。市販前のプロタイプじゃないか、浩太は疑った。名門チームの有名選手である高梨には、おそらく一流シューズメーカーのフィッターがついているのだろう。一方の浩太が、試合用に大事に履いてきたのは同じメーカーの旧型だ。

高梨との距離はわずか三メートルだが、^①浩太にはそれが途轍^{とてつ}もなく遠い距離に感じられた。

この差は、埋められない。所詮^{しよせん}、俺はこいつに勝つことは無理なんだ。勝てるわけがない。

A 感で一杯になった浩太の胸で絶望が膨らみ始めた。浩太の感情は行き場を失い、彷徨^{さまよ}い、ついに八方塞がりになろうとしている。その時――。

「浩太。――浩太」

ふいに誰かが呼びかける声がして、浩太は思考の渦から現実^(注4)に引き戻された。甲斐だ。

「空を見てみる」

その甲斐の声がいった。運営管理車からマイク越しに語りかけてくる声だ。

えっ――？

思いがけないひと言に、浩太は、前を走るコバルトブルーのユニフォームに固着したようになっていた視線を上げ、遠く前方に向けてみる。

今まで雲に分厚く覆われていた空に出来た裂け目から、神々しいほどの太陽光線が地上へ降り注いでいた。天空から光の粒子が零れ落ちてきて、透明な器の中ではじけているかのようだ。それが輝ける天然のオベリスクのようにして、そこにある。自分を誘うかのよう^{いざな}に。それを目にしたとたん、浩太ははつと我に返った。^②

波が押し寄せてくるように、沿道^bのカンセイが戻ってきた。

「四年間、お前はやれることはすべてやってきた。精一杯努力してきたんだ」

甲斐が語りかけてくる。「お前がやるべきことは、自分に誇りを持って走る、ただそれだけだ。お前にはお前の走りがあるはずだ。一人のランナーとして、誇りを取り戻せ。今がその時だぞ」

腕を振り、一步一步地面を蹴りながら、浩太は甲斐の言葉に耳を傾けている。

「浩太。^③今までお前が背負ってきたものは全部ここに置いていけ。肩の力を抜いて、気楽にいきましょう。リセットして、あの光に向かって走れ。さあ、気持ちよく走るぞ。これからだ」

なぜだろう。涙がこみ上げてきた。走りながら顔を上げ、浩太はその空を見つめる。暗い雲が割れた隙間に覗く^{のぞ}空の、群青^{ぐんじよう}にも近い青さが目に鮮やかだ。きつと、この青さの向こうに未来と呼べるものがあるのではないか。そんな気がした。自分が進むべき未来が。唇を噛み、コース前方に視線を戻す。腕が振れてきた。脚が前に伸びはじめる。地面を蹴る、軽快な音が心地よく耳に届いた。それまでの重苦しい感覚は魔法のように消え、しなやかさが体に宿る。きつと、あの空がくれたんだ――そう浩太は思った。(略)

くそっ。抜けない！

前に行く、東西大の高梨との距離は思うようには縮まらなかった。三十メートルはあるだろうか。

高梨もまた、背後から浩太が近づいていることを察知し、ペースを上げて振り切ろうとしているのがわかる。

高梨の揺さぶりに浩太は必死に食らいつき、さつきから前に出る機会を狙っているのだが、高梨はなかなか隙を見せなかった。高梨はコースを知^c悉し、戦い方を知っている。

十キロの給水ポイントを過ぎたあたりで始まった二人の縦走はすでに四キロほど続いていた。高島町の交差点を越えてJR根岸線のガード下をくぐる。それまで二車線だった道路が四車線に変わると、突如視界が開けた。ビルが建ち並ぶ大都市の光景が二人のランナーを見下ろしている。頭上を首都高の高架が走るコースに応援客の声援が輻輳^{ふくそう}して響き、高梨との距離を詰め切れない浩太を焦らせた。経験したことのないレース環境だ。沿道から注がれる視線や声援までもが、見えないカケラ「のように」降り注いでくる。十四・四キロの給水ポイントが近づいてきた。

抜けないかも――。そんな弱気がどこからともなく頭をもたげ、脳裏を過^{よぎ}っていく。東西大の給水係が飛び出し、前を行く高梨にボトルを差し出すのが見えた。

浩太の給水係は、同じ清和国際大のチームメイトが務めてくれることになっている。ところが――。

清和国際大のジャージに「給水」のビブスをつけた人影が、飛び出すや、「なにやってんだ、浩太！」④大声で浩太を叱りつけた。

両手にボトルを握り締めて駆け寄ってきたのは、事前に聞かされていたチームメイトではない。監督の北野公一^(注5)だつた。いったい……考える間もなく、

「バカ野郎！」その北野は、頭ごなしに浩太をどやしつけた。「前半しつかり休んだだろう。さつきとギアを上げないか！」容赦^{けしか}ない檄である。「こんなところで負けてたまるか。お前なら抜けるはずだ。抜け！」

横浜駅前の給水ポイントは、給水係と併走できる距離が長い。五十メートルほどあるだろうか。誰憚^{たはばか}ることのない大声の叱咤^{しった}に、浩太はうなずくのがやっとだ。

「四年間のすべてをぶつけろ！――お前ならできる！お前なら――できるはずだ！」
えっ――浩太は思わず目を見開いた。北野の顔が涙でぐしゃぐしゃになっていたからだ。

「前を向け！」それが北野の最後の激励だった。北野が声を振り絞ったところで、二人の併走にはピリオドが打たれた。陸上競技人生の中でどれほどの距離を走ってきただろう。だが、一つだけ確かなことがある。これほど力強く、勇気をもらえる数十メートルは絶対になかったということだ。

たしかに――世の中には実を結ばない努力もあるだろう。だが、何も生まない努力なんかない――。それに気付いた浩太の胸に、熱いものがこみ上げた。――監督、ありがとうございます。心の中で浩太はつぶやき、前をいくコバルトブルーのユニフォームを静かに見据えた。

抜け！北野の力強い言葉が、浩太の背をぐいと押してくれた気がする。どうしても届かなかった高梨の背中が、その時じりっと近づいてきた。

――学生連合と東西大の差、もうほとんどありません。スタッフからの一報が入った時、徳重^(注6)は虚^{きょ}を突かれて視線を上げ、三号車が映している映像を凝視^dした。「まさか……」

コバルトブルーの東西大のユニフォームのすぐ後ろに、学生連合のタスキをかけた松木がいる。

「浩太。いいぞ、ゴーゴーゴー！」学生連合の運営管理車からマイクを通じた甲斐の声が掛かった。「最後の三キロだ、浩太。気持ちよく走ろう。四年間、よく頑張った。この景色を目に焼き付けておけ。ここから、お前の新しい人生が始まるんだ」選手への優しさ、勝負を超越した世界観に導くような言葉たちが、松木に力を与えたかに見える。

目の当たりにしている松木の粘りは、何かが起きることを予感させるに十分だ。⑤例え参考記録にしかないとしても。

問七 傍線部④『「なにやってんだ、浩太！」大声で浩太を叱りつけた』とあるが、この時の北野監督の気持ちとして最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選びなさい。

- ア やる気のない浩太の走りに不快感を示し、怒りを感じている。
- イ 浩太の乱れたフォームを心配し、すぐに指摘して直そうとしている。
- ウ 浩太の遅い走りに危機感を抱き、苛立ちを募らせている。
- エ 浩太が持っている力を出し切れるように、気持ちを奮い立たせようとしている。
- オ マイペースな浩太の走りに憤りを感じ、皆の前で恥をかかせようとしている。

問八 傍線部⑤「何かが起きる」とあるが何が起きるのか。本文中の語句を用いて答えなさい。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

日本には、「一流中学から一流高校、一流大学へと進んで、卒業後は一流企業か一流官庁に入り、良いポジションにつけば人生はバラ色」という考え方が昔からあったため、親はこぞって子供を塾に通わせるようになりました。

あなたの顔さえ見れば「勉強しなさい、勉強しなさい」と言う父親・母親も、あなたと同じ年頃には、周囲の大人達から同じようなプレッシャーをかけられていたわけです。

「一流大学から一流企業に入れば幸せになる」というのはただの幻想に過ぎません。ところが、今ではこの幻想が、「一流大学から一流企業に入らなければ不幸になる」という強迫観念にまでなつてしまいました。私はこれを「選抜恐怖症」と呼んでいます。

会社に入れば、「平社員より係長が偉い、係長より課長が偉い、課長より部長が偉い、部長より取締役が偉い、取締役より副社長が偉い、副社長より社長が偉い」というポジションの格付けがありますが、これは社内でしか通用しない格付けです。しかも、ポジションが上だからといって必ずしも幸せとは限らない。

自分の仕事に情熱を持てなくなった大会社の取締役よりも、町工場で機械の設計や組み立てをしながら、「もっと性能のいい機械を作るんだ。絶対に自分達で世界一のものを作ってみせる」と夢をふくらませている工員達の方が、よほど幸せだと思いませんか？

出身校や勤め先の名前や役職の有無だけに頼る肩書き社会は、「金の鳥かご」のようなものだと思っています。外から見れば立派なかごでもかごはかごです。かごの中でおとなしくしていれば安全に生きられるかもしれませんが、無限の可能性を秘めた外の世界には、永久に飛び立つことができません。

与えられた餌を食^{えさ}べながら、メッキかもしれない金びかの鳥かごの中で飾り物のようにして一生を送るのか、羽は少し傷んでも、大空を好きなように飛びまわり自分の力で餌をつかまえる、たくましい野鳥として生きるのか。どちらの生き方をとるかは、あなたの考え方しだいです。

①「金の鳥かごに残るべきか、飛び立つべきか」という問題には、正解はありません。一人ひとりが自分の頭で考え、自分の心に問いかけ、自分の価値観に基づいて、納得のいく答えを出していただくさい。

今、みなさんが学校でやっている勉強は、「与えられた問題を解き、答えは一つ」というものかもしれませんが、これからの人生では、「正解のない問いに、いかに答えるか」が問われます。親や先生や友達の意見に耳を傾けることは大事ですが、最後の決断の決め手になるのは、「自分はどうか生きたいか」というあなた自身の素直な気持ちです。

誤解のないように言いますがおきますが、私は決して「勉強なんかする必要はない」と言っているわけではありません。学校の成績が良いか悪いか、偏差値の高い学校に入ったかどうかだけで、人の才能や幸福度を判断すべきではない、と言っているのです。

日本の親も子も、「A」から自分自身を解放しない限り、本当に自由な心を手に入れることはできないでしょう。

(今北純一「自分力を高める」より)

問一 本文中には、人間の二通りの生き方を鳥の生き方に例えている箇所がある。それぞれの生き方について述べている一文を抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問二 傍線部①「金の鳥かごに残るべきか、飛び立つべきか」について、人間の生き方に例えるとどのような生き方を言っているのか。本文中の言葉を用いて四十五字以内で答えなさい。

問三 空欄「A」に入る語を文中より五字で抜き出しなさい。

問四 本文の内容と一致するものを、次のア～オのうちから一つ選びなさい。

- ア 夢を追いかけて生きるより、現実を考えて生きた方が安定した人生を送ることができる。
- イ 人生の充実感は、自分が本当にやりたいことを追及することでは得られない。
- ウ 新しいことに取り組むより、従来のままで自分の好きなことを継続していくことが大切である。
- エ 親が敷いたレールを歩いていくことで、結果的に地位や名誉を得ることができ幸せになれる。
- オ 社会のあり方が大きく変わる中で、学歴がないと仕事を通して自己実現をすることは難しい。